

児童・生徒作品コーナー

今回は光中学校の生徒の読書感想文をご紹介します。



3年 椎名 律子 (敬称略)

「ムツちゃん」の誌を読んで

この本は、戦争で死んでいった一人の少女の話です。

私は戦争の本を何冊か読んだことがあるけれど、ムツちゃんほどかわいそうなお子はいないと思います。ムツちゃんは、小学六年生、十二歳です。父親は軍隊にとられ、母親と弟は、戦火に逃げまどう中ではぐれてしまい、一人ぼっちになってしまったのです。オバさんの家に行ってきたけれど、ムツちゃんは「肺病」にかかってしまい、赤ん坊にうつるといけないということ、防空壕の中でたった一人で生きていたのです。十二歳の病気の少女が、たった一人で真暗な防空壕の中で、ろうそくの火をたよって、食糧もなく、竹筒の水もわずかしかないという中で生きていたんです。今の私達なら、そんな事考えられないと思います。なぜなら、食糧や水も豊富にあるし、甘えられる親もいます。

ムツちゃんはみんながいやがる、「空襲警報」を喜んだと思いました。たくさんの方が避難してくるとにぎやかになるから。ムツちゃんが一人ぼっちじゃなくなるこの時がムツちゃんにとっては、うれしさだったと思います。私もしその立場だったとしても、ムツちゃんと同じ事を思ったでしょう。

避難してきた人の中に「ムツちゃんの子 たった一人の友達」がありました。その子

は町子ちゃんといって、この本の著者です。「お水ちょうだい」と言った町子ちゃんに、ムツちゃんはお水をあげようと思いました。でも、町子ちゃんの母親は「がまんしなさい」と言いました。もつとひどいのは、ある一人のおばあさんは、「あんた肺病やないの、気やすう言わんとき」とムツちゃんを叱りつけたのです。一人ぼっちでつらい思いをしているムツちゃんにとつては、とっても傷つく言葉だったと思います。それもムツちゃんは、十二歳の少女なのだから。

戦争が終わり人々が防空壕から出て行く時ムツちゃんは「また一人ぼっち……」と何度か思ったでしょう。戦争が終わってもまだ防空壕の中に放っておかれたムツちゃんは、水の切れた竹筒を握ったまま死んでいったそうです。病気で食べる物もなく餓死してしまつたムツちゃん。町子ちゃんの母親も、この話を聞いてから、涙を流しました。「自分の事や、自分の家の事だけを考えるのではなく、他人の事も考える」ということに気がついたからだと思います。

私はこの本を読んで、戦争というものは、こわく、悲しいものだとすることに気がつきました。家を焼いたり、人を殺したりするだけではなく、ムツちゃんのような、やさしい心をもうばつてしまうから。

「あんた肺病やないの、気やすういわんとき」といった言葉、「水の切れた竹筒を握ったまま死んでいたムツちゃんの姿」には、涙が流れました。やさしい心を持った。まだ十二歳のムツちゃんを、防空壕の中に一人ぼっちにさせた人が、にくいと思いました。だから戦争は、もう二度とおきてはいけないものだと思います。

父は軍隊に奮われ
母と弟と、はぐれ

防空壕の中で一人ぼっちで

餓死したムツちゃん

十二歳の少女を死に追いやったものは――



3年 伊藤 恵子

「目が見えなくても」を読んで

フランスの貧しい農家に生まれたルイ・ブライユ、三歳になる前に目が見えなくなつてしまつた。でも父・母・兄・姉などの温かい励ましですくすく育ち、家の中の家具やその他の物はいつも同じ所に置いてあったりし、手さぐりで何でもわかるようにしてあつた。それも大変な事だ。私達はいつても何かを使つたら、すぐその場へ置き忘れたりしまし忘れたりしてしまふ。家族の苦労も大変だったろうが、ルイの努力もすばらしかった。目の見えないのに、普通の学校へ行き、一度聞いた事は忘れないように頭の中へ覚えておく。目で見、ノートへ書きこんでおいても忘れてしまふ私。見習わなくてはと思う。

学校の先生や教会の神父さんは、ルイの努力と目覚ましい進歩に感激し、パリの盲学校をルイに勧めた。今まで家族と離れた事のないルイを、父・母はとても心配したが、とうとうルイはパリの盲学校へ行く事になった。不安とうれしきで複雑な気持ちだったろう。でも、その頃の学校は、奨学金が出る全寮制とはいっても、貧しい食事、盲人でもできる苦しい手作業。過労や栄養不良で家族の人達に心配をかけたりましたが、そんな中でもよく勉強などをし、下級生に物を教えられるようになった。

ルイ十四歳の時、当時のバルビエ大尉が十二点数字という盲人用のソノグラフ

ひかり歌壇

急激につる寒さにほんのりと

紅さす楓に温さ覚ゆる

伊藤 定男
鈴木 恵美

秋暮れてやる方もなき想いあり

そぞろ歩けば暮靄たち込む

越川 雪枝

ひ弱とも言はれし吾れが農に馴れ

農婦となりて古稀を迎えぬ

伊藤 鏡子

蔓草のからむ近道歩み行く

砂さらさらと足のめり込む

越川 ふう子

去年今年母と兄とを奪いける

刻は音なく冬さりにけり

土屋 好

今はも又児の手つなぎて小春日の

赤まんまの道歌い歩きぬ

竹内 紀葉

うから等と映の露天の湯に浸り

仰ぐ星空すみ清まれり

竹内 紀葉

みなぎろう思ひ自ずと頭たしめて

初春の光のそこはかとなく